2

氏　　名	五艘みどり
学 位 の 種 類	博士（観光学）
報 告 番 号	甲第５２１号
学位授与年月日	２０１９年9月１９日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	ルーラルツーリズムにおける農村女性の役割 ―イタリア南チロルを事例として―
審 査 委 員	（主査） 杜　国慶（立教大学大学院） 佐藤 大祐（立教大学大学院） 溝尾 良隆（立教大学名誉教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

第１章　序論
　１　研究の背景と目的
　２　先行研究
　３　研究の枠組み
　４　概念の規定
第２章　南チロルのルーラルツーリズムと農村女性
　１　南チロルの概要
　２　南チロルの歴史と農業
　３　南チロルにおけるルーラルツーリズムの導入と発展
　４　南チロルの農村女性
第３章　県内ネットワークにおける農村女性の役割の変化
　１　調査の概要
　２　農産物の生産と販売における新たな役割
　３　地域資源の観光資源化における新たな役割
　４　アグリツーリズモ運営者という新たな役割
　５　経済と政治における存在感の向上
第４章　集落内ネットワークにおける農村女性の役割の変化
　１　農家間および農家と非農家を結び付ける新たな役割
　２　経営者としての存在感と家庭内の役割の変化
　３　既存のネットワークへの関与の深化
第５章　南チロルのルーラルツーリズムにおける農村女性の役割
　１　ルーラルツーリズムを契機としたネットワークの拡大
　２　ネットワークの拡大と農村女性の役割の変化
　３　ルーラルツーリズムの内生性、補完性、エンパワーメント
　４　ルーラルツーリズムの埋め込み、持続性
第６章　結論
　１　統合型ルーラルツーリズム形成における農村女性の役割の変化
　２　統合型ルーラルツーリズム理論の問題点と再構築の方向性
参考文献
索引
謝辞

（2）論文の内容要旨

農産物価格の低下と農村人口の都市流出による農村部の衰退は、先進国共通の問題である。その打開策としてルーラルツーリズムが注目されるが、地域住民への社会的、経済的効果の還元は疑問視されており、望ましい導入方法が議論されている。一方、農村の維持には女性の定着が不可欠であり、農村女性の社会進出も進むなか、ルーラルツーリズムへの女性の関わり方もより注目されて良い段階に来ている。そこで本研究は、イタリアの南チロルの農村女性に注目し、彼女達がルーラルツーリズムにおいてどのような役割を得て発展に貢献したのかを、統合型ルーラルツーリズムの視点を用いて明確にすること目的としている。統合型ルーラルツーリズム（Integrated Rural Tourism）は、Saxena や Cawley、Gillmor らが提唱した新たなルーラルツーリズムの概念で、これまでの内発的観光開発の考え方に農村住民の主体的な外部との連携を加えた概念である。Barcus は統合型ルーラルツーリズムの特徴をネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性としたが、本研究ではこの 7 つの特徴を分析の視点に応用する。本研究の意義は、ルーラルツーリズム発展における農村女性の役割を分析対象にするという新規性、統合型ルーラルツーリズムの考え方に一石を投じるという理論的批判の 2 点にある。なお、本研究の内容は、南チロルでアグリツーリズモ運営に関わる農村女性へ向けたアンケート調査、県内集落のサン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ農家と南チロルの農村組織等へのインタビュー調査としている。

本研究の構成は、第 1 章を序論とし、第 2 章は南チロルのルーラルツーリズムと農村女性について整理し、第 3 章では県内、第 4 章は集落内のネットワークにおける農村女性の役割の変化について分析する。第 5 章は南チロルのルーラルツーリズムにおける農村女性が果たした役割について分析を行い、第 6 章を結論としている。

南チロルは複数の国に統治された歴史から高い自治意識を持つ。主要言語はドイツ語で、農村部はドイツ語系文化が強く残る。南チロルは 1972 年にイタリア自治県となってから約 20 年かけて自治を確立し、その過程で主産業の農業を強化した。同時に農業の担い手である農村女性が兼業せず自宅で起業する方法が模索されるようになり、1981 年に南チロル農村女性協会が設立され、早期に農村女性の社会的地位向上が図られた。南チロルの農村女性はルーラルツーリズムの導入にも貢献した。1960 年代の南チロルでは農業収入の低下から農村人口が都市へ流入したが、南チロルの伝統とアイデンティティを継承する農村住民の都市流入が政治的に問題視されるようになり、南チロル農民連合とカトリック教会が協力してオーストリアの「農村で休暇」を紹介して農家民宿の流れを生んだが、この時に広報役となったのが南チロルの農村女性であった。こうしてオーストリアの影響を受け始まった農家民宿だが、1985 年にイタリアの国法第 730 号法（通称アグリツーリズモ法）が制定されると、県は農家民宿をアグリツーリズモと改めて制度設計を進めた。そして南チロルのアグリツーリズモは、農家のみが経営を行う 6 部屋または 10 ベッドまでの宿泊施設で、食事

は 80%以上の地域産品を出し、観光労働日数が農業労働日数を超過せず、開業時には基本講習を 85 時間受講するといった規定が設けられた。1999 年には南チロル農民連合傘下にルーラルツーリズム推進組織のルーター・ハン（Roter Hahn）が設立され、農家のアグリツーリズモ開業を支援したこともあり、アグリツーリズモ数は2,798軒、宿泊者数は374,093人（2015 年）と急増した。

県内では、ルーラルツーリズム登場以前に、狂牛病問題などを背景に農村女性が農産物の安全性に関する情報提供を行う農産物メッセンジャーのネットワークが存在し、農村女性が社会で主体的に活動する基盤が形成されつつあった。ルーラルツーリズム登場後には農村女性は、農産物生産販売ネットワークを形成して自家用の農産物加工品をゲストに土産品として販売する役割を担い、地域資源の観光資源化によるネットワークを形成して農家らしい体験プログラムをゲストに提供し、次世代教育ネットワークを形成して担い手に家族を巻き込みながら県内小学生に農場教育を行い、アグリツーリズモ講習を契機にアグリツーリズモ運営者ネットワークを形成した。また、一部のアグリツーリズモ農家は海外ゲストのネットワークを形成し国際交流に視野を拡大させた。さらに、農村女性はルーラルツーリズムで活躍することで県内における既存の経済ネットワークにおける存在感を向上させた。

集落内では、アグリツーリズモで提供する食事の材料調達を契機とした、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークが形成され農産物の販路拡大に貢献し、また、アグリツーリズモとレストランのネットワークも形成され地域住民の集う場を創出した。さらに、アグリツーリズモ運営者同士のネットワークは県内と同様に集落内にも形成され、運営者の友人の獲得や啓発の機会を得た。このネットワークから派生して、アグリツーリズモ運営者同士による趣味のネットワークが形成された。このようにアグリツーリズモ運営に関わる農村女性は、新規にネットワークを形成すると同時に、既存のネットワークへ組み込まれ、農業や既存観光業者のネットワークと繋がり社会参画を強めたり、育児などにおける近隣住民との互助ネットワークを強めたりした。アグリツーリズモ運営を積極的に行う農村女性の家庭内では、女性における経営者としての存在感が増し、同時に家族間の役割分担が変化した。

農村女性とネットワークの関わりにおいては、アグリツーリズモ運営に関わる農村女性は多くの場合において経済ネットワークにおける存在感を高めており、なかでも複数のネットワークに所属する農村女性ほど積極的にアグリツーリズモを運営していることを示した。また、農村女性によるアグリツーリズモ運営が農業の活性化に貢献し、同時に農村女性の社会参画を促したことを示した。農村女性のネットワークの拡大においては、アグリツーリズモ運営に関して学びを重視する女性は県内ネットワークに、アグリツーリズモとレストランを重視する女性は集落内のネットワークに拡大が見られるという 2 つの類型を示した。さらにネットワークの広がりにおいて農村女性が果たした役割は、統合型ルーラルツーリズムの特徴である内生性、エンパワーメント、補完性、埋め込みを示したが、県内におい

ては農業的ネットワークに内生性が、観光業的ネットワークにエンパワーメントが強く示され、集落内で2000年以降に形成されたネットワークは補完性を示すことを明らかにした。

結論として、ルーラルツーリズムにおける農村女性の重要性と、農村女性を扱う場合における統合型ルーラルツーリズムの理論のあり方という 2 点を指摘した。南チロルの農村女性はルーラルツーリズムへの関わりを通して多様なネットワークを形成し、新たな役割を担うが、その過程で既存の価値観を変化させ次世代にも影響を与えた。そして農村女性のルーラルツーリズムへの関与は、ルーラルツーリズムの発展に貢献したのみでなく、農業の活性化にも貢献した。こうした農村女性の活躍の背景には南チロルの高い自治意識と、地域への強い誇りが社会・文化的背景として存在した。Barcus の統合型ルーラルツーリズの 7 つの特徴は、ネットワーク以外の特徴を並列に扱うが、本研究のように農村女性を分析対象とした場合には、内生性とエンパワーメントが深く関係することが明らかになり、また埋め込みと持続性は 5 つの特徴が述べられてこそ示される特徴であることを指摘することができる。本研究ではルーラルツーリズムにおける農村女性の役割を分析することで、ルーラルツーリズムにおける農村女性の重要性を明らかにしたのみでなく、統合型ルーラルツーリズムにおいて農村女性を分析する場合の理論的再構築の方向性を示したという点で、意義のある研究となったと考えている。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

農産物価格の低下と農村人口の都市流出による農村部の衰退は、先進国共通の問題である。その打開策としてルーラルツーリズムが注目されるが、地域住民への社会的、経済的効果の還元は疑問視されており、望ましい導入方法が議論されている。一方、農村の維持には女性の定着が不可欠であり、農村女性の社会進出も進むなか、ルーラルツーリズムへの女性の関わり方もより注目されて良い段階に来ている。そこで本研究は、イタリアの南チロルの農村女性に注目し、彼女達がルーラルツーリズムにおいてどのような役割を得て発展に貢献したのかを、統合型ルーラルツーリズムの視点を用いて解明すること目的としている。統合型ルーラルツーリズムは、欧米で提唱された新たなルーラルツーリズムの概念で、これまでの内発的観光開発の考え方に農村住民の主体的な外部との連携を加えている。Barcus は統合型ルーラルツーリズムの特徴をネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性としたが、本研究ではこの 7 つの特徴を分析の視点に応用する。本研究は、南チロルでアグリツーリズモ運営に関わる農村女性へ向けたアンケート調査、県内集落のサン・ジェネジオ村のアグリツーリズモ農家と南チロルの農村組織等へのインタビュー調査を通して、南チロルのルーラルツーリズムと農村女性について整理したうえで、県内ネットワークと集落内ネットワークに分けて農村女性の役割の変化を考察する。県内では、ルーラルツーリズム登場後に、農村女性は農産物生産販売や地域資源の観光資源化などによるネットワークを形成して農家らしい体験プログラムをゲストに提供し、既存の経済ネットワークにおける存在感を向上させた。集落内では、アグリツーリズモの食材調達を契機として、アグリツーリズモ農家と非アグリツーリズモ農家のネットワークを形成して農産物の販路拡大に貢献した。さらに、農業や既存観光業者のネットワークと繋がり社会参画を強め、女性経営者としての存在感が増したことで、家族内の役割分担も変化した。

（２）論文の評価

本研究の意義は、ルーラルツーリズム発展における農村女性の役割を分析対象にするという新規性、統合型ルーラルツーリズムの考え方に一石を投じるという理論的批判の 2 点にある。本研究は統合型ルーラルツーリズムをネットワーク、規模、内生性、補完性、エンパワーメント、埋め込み、持続性の側面から考察し、農村女性の役割が全ての側面において確認できた。南チロルの農村女性はルーラルツーリズムへの関わりを通して多様なネットワークを形成し、新たな役割を担うが、その過程で既存の価値観を変化させ次世代にも影響を与え、農業の活性化にも貢献した。本論文により解明された以上のメカニズムは、日本の

ルーラルツーリズム研究にも適用しうるものであり、今後の観光地理学研究にも有益である。さらに、言語などの壁による情報の入手困難さという制約を克服して第一次資料を獲得したことは、研究の価値を高めた。

審査会では、既存の統合型ルーラルツーリズムの研究と本研究の農村女性との相互関係、タイトルの付け方、日本の観光開発への示唆、エンパワーメントの考察などの点とそれを踏まえた今後の課題が示されたが、これらは本論文の研究上の貢献を損なうものではなく、本論文の成果をより精緻化し発展させていく方向性をもつものと判断した。審査委員は、本申請論文の観光研究としての独自性と研究上の貢献を高く評価し、博士の学位に相当するとの見解で一致した。